



馬耳東風

2月19日の第一回愛玩動物看護師国家試験を3週間後に控えた1月末の午後にこの原稿を書いている。たぶん試験当日、受験するみなさんにとってはまさに一世一代の日となろう。どうか体調万全で日ごろの努力を十二分に発揮できますように。そしてこの日は日本全国、各動物病院から看護師が一斉に消え、獣医師はきっと日頃の彼らのありがたみを身をもって思い知る日となるに違いない。この文章が掲載されるころには無事に試験が終わり、臨床現場で大きな混乱もなく、多くの合格者が希望を持って社会へ羽ばたいてくれることを心から願いたい。

そしてここまでの道のりを目前で見てきた一人として「愛玩動物看護師」の誕生はとても感慨深い。法律の中に組み込むことの難しさ、意義を深く考え、業界のために困難に立ち向かう勇気と手法を後進に伝えて行かなければいけないと強く思う次第である。またそれに伴う責任の重さもひしひしと感じている。関係者の方々の並々ならぬ努力、ご苦労には本当に頭の下がる思いであり、僭越ながら「ありがとうございます。お疲れ様でした」と感謝の言葉を述べたい。

しかし、その一方で資格取得後に待ち受ける業界のさらなる課題にも目を向け、早急にその対応を考えていかなければならない。犬の飼育頭数は2008年の1,310万頭から昨年は705万頭となった。この10数年にあっという間にその数がほぼ半減してしまったことになる。加えて人々の動物飼育願望も年々低下している。犬猫の人口構成がきれいなピラミッドを構成し、その人口を維持

するためには少なくとも1歳未満の比率が8%は必要とされているが、4%を切る現状はとても厳しいと言わざるを得ない。わが国の人口減少、高齢化等により、将来的には400万頭になるとの予測もある。そして人間同様にペットの世界もまさに少子高齢化。小動物診療マーケットがかろうじて現状維持もしくは微増の状態であれば診療単価の高い高齢動物の治療費が支えているのかもしれない。あるペット業界の重鎮から「動物病院の先生方は、今がピークということをちゃんと認識されているのでしょうか」と質問され、「まさに！」と思い、言葉に詰まった記憶がある。愛玩動物看護師はもはや小動物医療現場の中で不可欠であり、この春だけでなく、これからも毎年その国家資格者は誕生してくる。

上述の環境の中、果たして彼らだけでなく獣医師も安心して業務を続けて行く業界であるにはどうしたらよいのか。産業の栄枯盛衰の波（寿命）は30～40年と言われている。栄華を極めたわが国の基幹産業である自動車業界。今やガソリン車から電気自動車へ、消費者の購買意欲の変化、急速なデジタル化、人手不足という大きな転換期に直面しているのは周知のとおりだが、たとえば必死にもがいている彼らから、なにかヒントを得ることはできないものだろうか。

このたび愛玩動物看護師という守らなければならない共に働く仲間が増えたことは業界にとってとてつもなく大きな変化である。

この変化の時こそ足下の議論をするのではなく、未来を見据えた革新的な議論が巻き起こることを切に願う。

(も)